

**クリスマス** マタイによる福音書2章1～23節 讚美歌21 258(はじめ) 249(おわり)

現在を生きるわたしたちにとって、占星術師というのは、何か、まじないごとをする、クリスチャンにとっては頼ってはならない者たち、という思いを抱くのではないのでしょうか。しかし、主イエス誕生の時代には、この占星術こそ、最先端の科学だったのです。天文学者、と言っても過言ではありません。占星術師が東方から来た、そして、3節、「これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々もまた同様であった。」というのは、大変皮肉なことです。遙か東方から来た占星術者たちが、救い主メシアを待ち望んでいた一方で、ユダヤ人は、自分たちの王に君臨する方の誕生に狼狽したのです。ここに、いかに当時のユダヤ人が自己保身に走っていたか、ということが読み取れるのです。律法学者たちは、ヘロデ王の勅命により、聖書を読みあさり、一つの解答を導き出します。6節に書かれている、ベツレヘム、というのがその答えでした。この預言が記されているのは、ミカ書5章1節になります。お読みいたします。「エフラタのベツレヘムよ／お前はユダの氏族の中でいと小さき者。お前の中から、わたしのために／イスラエルを治める者が出る。彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる。」この預言と、律法学者の解答には、決定的な違いがあります。ミカ書の預言には「彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる。」と書かれています。マタイの2章6節にはそれが記されていません。永遠の昔からおられる方、つまり、このユダヤ人の王が、神の子であることに、律法学者たちは目を留めなかった、ということなのです。ここにおいて、わたしたちは、主イエスの成人してからの歩みの苦しみ、そして受難を思わされるのです。

ヘロデ王は、占星術者たちを「わたしも行って拝もう」と嘘をついたうえで派遣します。占星術者たちは、11節にあるように黄金、乳香、没薬を贈り物として捧げました。この3つの贈り物は全て貴重で高価なものです。その中で、黄金は、最高の金属であり、主への礼拝にふさわしいものでした。乳香は、モーセの時代には神に捧げる物であり、また、当時ユダヤにおいては、王となるべき者に捧げる物でした。没薬は、古代エジプトではミイラを作る際に欠かせないものであり、当時のユダヤにおいても使者を葬るときに使われていた物です。実際、主イエスが墓の中に収められたときにも用いられたことがヨハネによる福音書19章39節に記されています。「そこへ、かつてある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモも、没薬と沈香を混ぜたものを百リトラばかり持って来た。」と記されているのです。これらのものを占星術者たちが捧げたのは、彼らが主イエスのご生涯を聖書の預言によって知っていて捧げたのか、あるいは、神からの啓示だったのかは解りません。この、マタイによる福音書は、主イエスが主であり、王であり、かつ、葬られる者であることだけを見つめているのです。

この後の聖書の記述にも、神の御意志が語られています。15節、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」、とはホセア書11章1節、「まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。エジプトから彼を呼び出し、わが子とした。」という預言の成就です。18節は、エレミヤ書31章15節、「主はこう言われる。ラマで声が聞こえる／苦悩に満ちて嘆き、泣く声が。ラケルが息子たちのゆえに泣いている。彼女は慰めを拒む／息子たちはもういないのだから。」という預言の成就です。さらに、23節、「彼はナザレの人と呼ばれる」とは、イザヤ書11章の預言と結びついています。旧約聖書に直接ナザレという町の名前は出てきません。比較的新しくできた町だったようです。ナザレという町は当時軽んじられていたようです。ヨハネによる福音書1章46節では、ナタナエルが、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言ったことが記されています。同じようにエッセイの株、根株といった表現はエッセイの息子ダビデ王、孫ソロモン王の栄光のかげりゆく衰弱した子孫、といった意味で旧約聖書の預言に現れているのです。イザヤ書11章1節から10節までを共にお読みしましょう。旧約聖書1078ページになります。よろしいでしょうか。

エッセイの株からひとつの芽が萌えいで／その根からひとつの若枝が育ち／その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊／思慮と勇気の霊／主を知り、畏れ敬う霊。彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。目に見えるところによって裁きを行わず／耳にするとところによって弁護することはない。弱い人のために正当な裁きを行い／この地の貧しい人を公平に弁護する。その口の鞭をもって地を打ち／唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。正義をその腰の帯とし／真実をその身に帯びる。狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ／その子らは共に伏し／獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ／幼子は蝮の巣に手を入れる。わたしの聖なる山においては／何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように／大地は主を知る知識で満たされる。その日が来れば／エッセイの根は／すべての民の旗印として立てられ／国々はそれを求めて集う。そのとどまる場所は栄光に輝く。

主なる神は、出エジプト記に記されたエジプトからのイスラエルの救いを御子イエスの身に迎らせることで、「ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方」(使徒言行録2章22節)である、ということ、を、わたしたちに解り易く示してくださっているのです。イエスという人は自分の力で預言を実現しようと、痩せ我慢をして苦悩の生涯をおくられたものではありません。自分自身では何もできない嬰兒(みどりご)の時から、預言を成就されていらっしゃるのです。このことこそ、イエスが救い主であることの完全な証拠なのです。

## ナザレの人 ルカによる福音書4章 16～30節 讚美歌21 248(はじめ) 197(おわり)

ヨハネによる福音書 1 章46節には、ナタナエルが「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言ったと書かれています。エルサレムの都から見てガリラヤは田舎であり、さらにその中でもナザレという町は軽んじられていたようです。城壁が無く、比較的新しい町だったようです。

18節からのイザヤの預言とは61章の預言でした。主イエスはその冒頭部分を読まれました。「主はわたしに油を注ぎ／主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして／貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み／捕らわれ人には自由を／つながれている人には解放を告知させるために。主が恵みをお与えになる年／わたしたちの神が報復される日を告知して／嘆いている人々を慰め／シオンのゆえに嘆いている人々に／灰に代えて冠をかぶらせ／嘆きに代えて喜びの香油を／暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために。彼らは主が輝きを現すために植えられた／正義の樅の木と呼ばれる。」集っていたナザレの人はこの預言の説き明かしを待っていたことでしょう。しかし主イエスは、この預言は、今実現したと仰いました。人々は、メシアがわたしである、今見ているわたしがメシアである、という福音に驚嘆しイエスを褒め称えながらも、イエスの生い立ちを知っている彼らは、それを知っているが故に躓いたのです。その後のイエスの発言、「預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ」、というのは、エリヤやエリシャを引き合いに出すまでも無く、ものごとわりと言えるでしょう。英雄は家庭では敬われない、そういうものです。主イエスは何故わざわざそのようなことを言ってナザレの人々を怒らすようなことをしたのでしょうか。主イエスは父なる神のご意思のままに発言されているのです。神の御心とは一体何だったのでしょうか。

ルカによる福音書の4章のはじめには主イエスが荒野でサタン誘惑を受けた事が記されています。「人はパンだけで生きるのではない」この言葉はあまりにも有名です。出典は申命記8章3節です。「主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。」この、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるため、というのが神の御心なのです。主イエスが敢えて故郷では敬われないということをして口にしたことには理由があるのです。主イエスのこの発言はそこに集っていたナザレの人々だけに向けられたメッセージではないのです。後の世になって、主イエスの御言葉が新約聖書となってわたしたちの前にメッセージとして届けられる、神の御心は、そこまで見通された神のご意思なのです。神は人が御言葉によって生きる、ということ、申命記だけでなく、この箇所においても改めて書き記すべき重要なメッセージとして、わたしたちに丁寧に教えてくださっているのです。主イエスを奇跡を行う方として見るのではなく、御言葉を発する預言者であり、また歴代の預言者たちによって預言されたメシアである、ということに気付きなさい、と神はわたしたちに語ってくださっているのです。

では、主イエスを生身の人間として見る事ができず、新約聖書のみ言葉によってしか知ることができないわたしたちには、このような躓きはない、この御言葉はわたしたちには関係ないと言えるのでしょうか。いえ、そうではありません。むしろ、わたしたちにとってこそこの主の諭しは重要なのです。主イエスのなされた不思議な奇跡の御言葉に、現代文明の中を生きる私たちは、かえって躓いてしまう事が多々あります。十字架の死と復活による贖いなんて、何か作り事みたい、そう感じるのが人の常なのです。神は、人は主の言葉によって活かされているのだ、というメッセージは、後代のわたしたちにとってこそ大切な神からのメッセージなのです。わたしたち人間は、聖霊の働きによらなければ神を信じる事ができません。その前に聖霊が導き神のご意思に気付くための御言葉が必要なのです。わたしたちはその御言葉によって救われ、神が予め用意してくださっている永遠の命を受け取る事ができるのです。人は主の口から出るすべての言葉によって生きる、とは、そういう意味なのです。

では、主を受け入れて救われた人には、この御言葉は関係ないのでしょうか。これもそうではありません。牧師、伝道師も人間ですから、ある人にとっては、その説教のくだい言い回しが気に入らないとか、福音を語っているのにまるで葬式のようにしんみりと哀しい声で説教する、など聖職者に対して不満を感じたり、聖職者との相性が悪かったりする事があります。また、教会に名を連ねる者たちは、聖徒の交わりとして、多くの信徒同士の交わりの時を持ちますが、その中で、人に躓く事が多いのです。このような事が私たちが現象として見ている神の姿であり教会の姿なのです。相性が悪くて転入会することは、決してやましいことではありません。聖書は、字が読めれば、誰にでも読めるものです。誰でも祈る事ができます。聖霊の働きによって、礼拝で聞いたメッセージとは別の神に御心を知ることもあるでしょう。しかし、主を信じている人たちにとって教会など不用だ、ということは決してありません。礼拝こそ主の愛と招きによって集う神の家であり、キリストの体なのです。とても聖徒の交わりとは思えないような集会にも主は臨んでおられるのです。そこで説き明かされる御言葉や兄弟姉妹の証しに私たちは教えられ生かされているのです。その中にあって、現象として起こっている人間同士の姿に目を奪われてしまうことなく、神の御言葉に聞き従う事が大切なのです。

**宮清め** ヨハネによる福音書2章 13～22 節 讚美歌21 311(はじめ) 294(おわり)

主イエスが子ロバに乗って、エルサレムに入城された後、すぐになされた事が、暴力的行為を以って、神殿の境内で商売をしていた人々を追い出した、といういわゆる「宮清め」の出来事でした。

17節、「あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす」とは、詩編69編10節、「あなたの神殿に対する熱心が／わたしを食い尽くしているの／あなたを嘲る者の嘲りが／わたしの上にふりかかっています。」に記されています。他の多くの場面では、弟子たちは主イエスのなされたことの意味を知ること鈍感であった事が福音書の中で克明に記されています。弟子たちは、詩編のこの預言を思い出したのです。当時、ユダヤ人の家庭ならば、詩編は、幼少の頃から読み継がれ語り継がれ歌い継がれていて、誰もが暗唱できるほど身近な存在でした。と同時に、それらの中には、日本のわらべ唄、例えば「かごめかごめ」のように、「一体これは何のことを言っているのだろう」、と思わせる不思議な歌詞を持った唄もあったのです。弟子たちは主イエスのなされた行動を見て、初めて詩編が何を物語っていたのかを知るのです。

マルコの福音書ではイエス御自身が「こう書いてあるではないか。『わたしの家は、すべての国の人の／祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたたちは／それを強盗の巣にしてしまった」とお語りになった事が記されています。この言葉はイザヤ書56章7節の最後の一行です。新共同訳聖書ではこのイザヤ書56節の1節から7節までに「異邦人の救い」と、小見出しが付けられています。主イエスが清められた神殿の場所とは、聖所を取り囲んでいた、異邦人の庭と呼ばれる場所でした。この神殿はヘロデの神殿と言い紀元前20年くらいから建てられ始め、完成までに46年かかりました。建物からすれば完成したばかりの清い、とも言える神殿だったのです。その境内の中で、ローマの通貨を神殿に納めるユダヤの通貨に両替する者や、捧げ物を売りさばっていた人たちがいたのです。主イエスは、それらのことをお許しにはなりません。

さて、子ロバにまたがって何の武力も無い平和の王として都に入られた主イエスが、暴力的行為を働いたことは、弟子たちにとっては驚異的な事件であったことでしょう。弟子たちはこの光景を見て「あなたの神殿に対する熱心がわたしを食い尽くす」という神の熱情を知るのです。「父なる神の神殿に対する熱心が主イエスに満ち溢れているので、父なる神を嘲る者の嘲りが主イエスの上に降りかかっている」、と弟子たちは知らされるのです。主イエスを殺害しようとする人間の考えは、この宮清めにおいて確定的なものとなります。ここに現れた神の熱情とは、一方で、神殿で行われるべきでないことに対する怒りであり、また、異邦人も救おうとする神の愛でもあったのです。ここにおいて、生まれただけで自分は何者でもないのに主の選民イスラエルであるというユダヤ人の驕りと、人類全体に救いの御手を差し伸べようとする神との間に、決定的な断絶が生まれたのです。この断絶、もっと言えばこの宮清めなくしては、主イエスの十字架の死もなかったかも知れません。少なくとも、わたしたち異邦人に救いの手が差し伸べられることは無かった、と言えるのではないのでしょうか。主イエスは生涯全てを父なる神の御意志に沿って歩まれました。主イエスはイスラエルの中に生まれ、イスラエルの中で生涯を過ごされました。福音を異邦人に伝道していったのは、復活の主イエスが派遣した弟子たちであり、また、パウロたちです。しかし、父なる神の御心は初めから全世界に広げられていたのです。そのことを示す最大の御業が御子イエス・キリストによる宮清めなのです。

では、決定的断絶が生まれてしまったユダヤ人は神から見放されたのでしょうか。いいえ、そうではありません。ヨハネが福音書を記していたとき、最も心を砕いていたのは、ユダヤ教とキリスト教の分裂に対する思い、すなわちユダヤ人の中からイエスをメシアと信じる人が一人でも多くあるように、という願いであったと考えられています。神は全ての人の神なのです。

現代を生きるわたしたちにとっても、この神の熱情は無縁のものではありません。聖書はパウロの口を通してこう語っています。信仰について、コリントの信徒への手紙一16章22節、「主を愛さないものは、神から見放されるがいい。」、また教会の一致について、ガラテヤの信徒への手紙5章12節、「あなたがたをかき乱す者たちは、いっそのこと自ら去勢してしまえばよい。」これらは呪いの言葉です。そのことを踏まえたくて、わたしたちは主イエス・キリストの十字架と復活の贖い、全世界への福音、神の子とされる恵みに、祈りの一致を持って応えていきましょう。わたしたち一人ひとりが聖霊の宮であり、心を合わせて祈るときに神がおられるのです。さらに厳粛に受けとめるなら、聖霊の宮である一人ひとりに神の熱情が宿っています。祈禱会においてもその中に神がおられ、神の熱情があるのです。また、礼拝において御聖霊が臨まれる時、御言葉の炎がわたしたちの罪を照らし出すのです。何時どこにおいても、わたしたちは、神の御前に正しくいることはできません。ただひたすら神の愛の恵みによって、わたしたちを聖なる者としてくださっているのです。一人ひとりを聖霊の宮としてくださっているのも、祈りの場に主が伴ってくださっているのも、礼拝に御聖霊が望んでくださっているのも、主イエス・キリストが十字架の死と復活による贖いを以って、わたしたちの宮を清くしてくださっているからなのです。祈りを合わせましょう。

## 最後の晩餐 コリントの信徒への手紙一 12章 23～29節 讚美歌21 79(はじめ) 81(おわり)

レビ記には神がイスラエルの民に命じた数多くの律法が書かれています。レビ記19章26節には「あなたたちは血を含んだ肉を食べてはならない」と書かれています。マタイ、マルコ、ルカ、による福音書においては最後の晩餐の記述がありますが、ヨハネによる福音書には最後の晩餐の記述はありません。「体を食べ、血を飲みなさい」という、主イエスの新しい契約の記念は、律法を重んじてきたユダヤ人には受け入れがたいものであり、ユダヤ人にキリストの福音を伝えるために書かれたとも言われるヨハネによる福音書には、一言も触れられていないほど、隔たりがあるものだったです。

主イエスは、ご自分が十字架刑に処せられ、その血と肉により、罪の贖いが完成する、という事実を弟子たちに解らせる前に、このようにして、主の救いの記念を予め定めてくださったのです。パウロは主の聖餐について、26節、「だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らされるのです。」という聖餐の意味を、23節「わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。」と証言しています。ここに於いて、最後の晩餐は、主を信じる者たちにとって一回きりの出来事ではなくなったのです。

29節には、「主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです。」と書かれています。主の体のことをわきまえる、とはどのようなことでしょうか。果たして主イエスと最後の晩餐を共にした12使徒は、主の体をわきまえていたのでしょうか。主イエスが裁判にかけられ十字架刑を受け、よみがえるまで、弟子たちは散り散りに逃げてしまいました。そのような弟子が、聖餐にふさわしい者たちなののでしょうか。わたしはここで、「ふさわしい」と断言しようと思います。何故なら、「このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らされるのです。」という26節の御言葉の通りに彼らは主の死の意味を後で思い知らされたからです。主の死の意味を知る、つまりナザレのイエスこそ救い主であると信じて救われた者たちは、主の死を告げ知らされる資格があるのです。主の死を告げ知らされても、まだ正しく受け止められない人、つまり、未信者が聖餐に与るのにふさわしくない人なのです。人間の信仰は弱く、信仰者は常によろめきます。しかし、主の死を告げ知らされて、悔い改めることのできる人は、主の体をわきまえている人であり、聖餐の食卓にふさわしい者なのです。

十字架刑前夜の最後の晩餐において、主イエスは自分を裏切ろうとする者を「人の子を裏切るものは不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった。」と言われました。ユダには悔い改めの余地は無かったのでしょうか。神のご計画の中でイエスを裏切った者に対してあまりに冷酷非情ではないか、と思われるかもしれませんが。わたしは、主イエスはユダを救うことが出来ないのではなくて、ユダの末路を見通していたのだ、と思います。わたしたちは、主の十字架と死と復活による贖いによらなくては、だれしもイスカリオテのユダのように「生まれなかったほうが良かった」と主に言われるような者たちなのです。主の救いの恵みを受けた者が皆、パンを食べ、ぶどう液を飲むごとに、生まれなかったほうが良かった自分が、いま救われて主の恵みに与っている、と思い知らされるのが、聖餐の意味なのです。まだ信仰が与えられていない人がこれを食することは、この主の贖いの深さを受け止め切れないことになるのです。聖餐の恵みに与るのにふさわしくない者とは、ただ、信仰が与えられていない人のことなのです。

このように聖餐をふさわしくない者が与ることには、大きな過ちがあります。また、それを勧める者は同罪以上と言ってもよいかも知れません。主イエスはマタイによる福音書の中でこのように断罪しています。7章22、23節、「かの日には、大勢の者がわたしに、『主よ、主よ、わたしたちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行っただけではありませんか』と言うであろう。そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう。『あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、わたしから離れ去れ。』」

パンやぶどう液はあくまで食べ物、飲み物に過ぎません。教会で配られたパンやぶどう液も実態は変わりません。しかし、聖餐が信仰に基づく聖礼典である限り、その儀式には意味があります。信仰があって聖餐があるのです。洗礼があって初めて聖餐があるのです。聖餐とは、信仰によって守らなければならない聖礼典なのです。

では信仰とは何なのでしょう。ヘブライ人への手紙11章に、簡潔に語られています。「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。」何一つご利益が無くても、キリストの再臨を待ち望み、最後の審判の後、永遠の命を得て完成された神の国に入るといふ希望に生きることなのです。

わたしたちは、何の勲も無い者たちです。聖霊によって招かれ、聖霊によって聖書を解き明かし、聖霊によって御言葉の意味を示され、父、子、聖霊の名によって洗礼を受けるのです。自力で得たものは何もありません。先に神の恵みがあって、それに応えつつ歩んでいくのです。主イエス・キリストの死と復活による贖いと、聖霊の働きが、クリスチャンに与えられた信仰のすべてなのです。その恵みの上に立つ人は誰でも神の子とせられ、主の再臨と永遠の命の約束が待っているのです。

**十字架** ルカによる福音書 23 章 32～49 節 讚美歌 21 306(はじめ) 303(おわり)

十字架の上で主イエスは嘲られ、罵られても、何一つお言葉をお返しになりませんでした。「自分を救ってみろ」という声にも、黙ったままでした。そして、イエスへの信仰を告白した十字架上の罪人の一人の罪を贖い、「あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる」と仰いました。今日、というのは十字架刑の死後のことではありません。いま十字架刑を受けている主イエスとその罪人が、十字架の上で既に樂園にいるのです。このことは周りの人々からすれば、何も見える形の無いものです。しかし、目に見えないところで、主イエスは、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。」と、とりなしの祈りを捧げ、十字架上の一人の罪人の罪を赦したのです。周りの人々に分かる出来事として起こったのは、44節以降、太陽が光を失い、神殿の垂れ幕が真ん中から裂けたということです。父なる神は、御子イエスの栄光を見せるのではなく、このような現象を通して、イエスが何者であり、また、神殿の幕を裂く、という形で、イエスの死が、人間の罪を贖い、これまで立ち入る事ができなかった聖域を見る事ができるようになった、ということを知らしめたのです。神は分かりにくい方法でご自分を現そうとされる方ではありません。旧約聖書列王記上18章25節から40節には、このような出来事が記されています。新共同訳聖書564ページになります。

エリヤはバアルの預言者たちに言った。「あなたたちは大勢だから、まずあなたたちが一頭の雄牛を選んで準備し、あなたたちの神の名を呼びなさい。火をつけてはならない。」彼らは与えられた雄牛を取って準備し、朝から真昼までバアルの名を呼び、「バアルよ、我々に答えてください」と祈った。しかし、声もなく答える者もなかった。彼らは築いた祭壇の周りを跳び回った。真昼ごろ、エリヤは彼らを嘲って言った。「大声で呼ぶがいい。バアルは神なのだから。神は不満なのか、それとも人目を避けているのか、旅にでも出ているのか。恐らく眠っていて、起こしてもらわなければならないのだろう。」彼らは大声を張り上げ、彼らのならわしに従って剣や槍で体を傷つけ、血を流すまでに至った。真昼を過ぎても、彼らは狂ったように叫び続け、献げ物をささげる時刻になった。しかし、声もなく答える者もなく、何の兆候もなかった。エリヤはすべての民に向かって、「わたしの近くに來なさい」と言った。すべての民が彼の近くに來ると、彼は壊された主の祭壇を修復した。エリヤは、主がかつて、「あなたの名はイスラエルである」と告げられたヤコブの子孫の部族の数に従って、十二の石を取り、その石を用いて主の御名のために祭壇を築き、祭壇の周りに種二セアを入れることのできるほどの溝を掘った。次に薪を並べ、雄牛を切り裂き、それを薪の上に載せ、「四つの瓶に水を満たして、いけにえと薪の上にその水を注げ」と命じた。彼が「もう一度」と言うと、彼らはもう一度そうした。彼が更に「三度目を」と言うと、彼らは三度同じようにした。水は祭壇の周りに流れ出し、溝にも満ちた。献げ物をささげる時刻に、預言者エリヤは近くに來て言った。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、あなたがイスラエルにおいて神であられること、またわたしがあなたの僕であって、これらすべてのことをあなたの御言葉によって行ったことが、今日明らかになりますように。わたしに答えてください。主よ、わたしに答えてください。そうすればこの民は、主よ、あなたが神であり、彼らの心を元に戻したのは、あなたであることを知るでしょう。」すると、主の火が降って、焼き尽くす献げ物と薪、石、塵を焼き、溝にあった水をもなめ尽くした。これを見たすべての民はひれ伏し、「主こそ神です。主こそ神です」と言った。エリヤは、「バアルの預言者どもを捕らえよ。一人も逃がしてはならない」と民に命じた。民が彼らを捕らえると、エリヤは彼らをキシオン川に連れて行って殺した。

この事件は「主は生きておられる」ということを誰にでも分かりやすく示している箇所だといえるでしょう。

では、何故神は十字架上のイエスを救わなかったのでしょうか。何故神は十字架上のイエスに栄光を与えなかったのでしょうか。それは、全人類に救いとそれに繋がる永遠の命を授けるために、ひとたび、御子イエスを罪人の一人に数えられたからです。わたしたちの主イエス・キリストを生け贄として、わたしたちの罪の代償の身代わりとさせてくださったからです。十字架上のイエスに栄光があるのなら、わたしたちは救われないのです。主イエスの生け贄としての死に、わたしたちの命がかかっているのです。

では、神は何故御子を降し犠牲としなければならなかったのでしょうか。神は全き善であられるから、完全な生け贄が必要だった、と言ってしまえば簡単ですが、神は自己完結したロジックを必要としていたのではありません。神の御子を十字架の上で犠牲とするほど、世を愛してくださった、その愛をわたしたちに知らしめるためなのです。神が先にわたしたちを愛してくださっているが故にわたしたちは神の愛に応え、神が先に罪の赦しを与えてくださっているが故にわたしたちは神の前に悔い改め、神が先に永遠の命を約束してくださっているが故にわたしたちは永遠の命を信じ、神が先にわたしたちを招いてくださっているが故にわたしたちはその招きに応えて主イエス・キリストを受け入れるのです。ここに於いて神のご意思とご計画がはっきりしているのです。人間となってくださった神、主イエス・キリストを信じることを、父なる神を信じることとイコールにしてくださったことによって、救いが世界中にもたらされているのです。その神の愛によって、十字架上で救われた罪人はそのいまわの際において、すでに樂園に入っているのです。生きておられる神はわたしたちを御許に招いています。十字架の贖いを信じる信仰によってわたしたちは救いの樂園に入るのです。

**イースター** ルカによる福音書 24 章 13～35 節 讃美歌21 334(はじめ) 317(おわり)

主イエスは父なる神に復活させられ、婦人たちにご自身を現されました。付き従ってきた弟子たちは、すぐに主イエスが復活なされたことを信じなかったことが、1 節から 12 節に記されています。かろうじてペトロが墓穴を見て主イエスが墓におられないことを確認したのです。本日お読みした箇所も、復活した主イエスに気づかなかった二人の弟子のエピソードです。

二人の弟子は、エルサレムからエマオという村へ60スタディオン、およそ11キロメートルの道のりを歩いていました。29 節に「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから。」と弟子が無理に引きとめた、と記されていますので、主イエスの顔が分からないほどの暗闇を歩いていたのではありません。16 節に、「しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。」と記されています。これは、どういったことでしょうか。二人の目は、神の力によって、イエスに気づかなくされていたのです。そして目を遮らせ、主イエスに気づかなくさせたことに神の御心があった、ということなのです。

19 節、イエスが「どんなことですか」と言われると、21 節に、二人の弟子は「わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださいと望みをかけていました。」と、自分たちが思っていたイエスの見方を言葉に出したのです。弟子たちは、ずっとイエスに付き従ってきたのに、イエスの十字架と復活による罪の贖い、という主イエスの成し遂げられたことの本質を見通していなかったのです。二人の心の目は神の御心知らなかったのです。神は心の目を開かせるために、肉体の目もまた遮らせたのです。

26 節に、主イエスは「メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」とおっしゃって、聖書全体がご自身を預言していることを説明されるのです。主イエスの生涯の大預言と言われるイザヤ書53章もお語りになったことでしょう。イザヤ書53章をご一緒に朗読しましょう。旧約聖書1149ページになります。よろしいでしょうか。

わたしたちの聞いたことを、誰が信じようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあるか。乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように／この人は主の前に育った。見るべき面影はなく／輝かしい風格も、好ましい容姿もない。彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し／わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせられた。苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを。彼は不法を働かず／その口に偽りもなかったのに／その墓は神に逆らう者と共にされ／富める者と共に葬られた。病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ／彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは／彼の手によって成し遂げられる。彼は自らの苦しみの実りを見／それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために／彼らの罪を自ら負った。それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし／彼は戦利品としておびたしい人を受ける。彼が自らをなげうち、死んで／罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い／背いた者のために執り成しをしたのは／この人であった。

申命記 18 章 18 節において、神がモーセに「わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立ててその口にわたしの言葉を授ける。彼はわたしが命じることをすべて彼らに告げるであろう。」と語られています。主イエスは神の言葉を語る預言者であるとともに、旧約聖書に預言されるお方でもあるのです。

二人の弟子は、30 節、「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。」この瞬間に主イエス御自身がよみがえって人間の罪を贖ったことに気づかせられるのです。32 節、二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合ったのです。「わたしたちの心は燃えていた」とは、主イエスを肉体の目で見ることないわたしたちが、聖霊に導かれて聖書を読み、語る者、聴く者に主の福音が示されたときの感覚と同じではないでしょうか。この二人の弟子は、肉体の目を神が遮ってくださったことによって、今日のわたしたちと同じような心の炎をたぎらせてくださったのです。二人の弟子は、このことによって初めて本当のキリスト者になったのです。おそらく伝道者にはならなかったのでしょう。一人は名が記されていませんし、18 節にあるクレオパという弟子の名も新約聖書の中でここにしか記されていません。クレオパという人はおそらく有名な信徒として教会に名を連ねていたのでしょう。わたしたちは、それぞれ置かれた場所で主を証する信徒として、信仰生活を歩んでいきましょう。

**ペンテコステ** 使徒言行録2章 14~42 節 讃美歌21 343(はじめ) 345(おわり)

五旬祭の日、過ぎ越しの祭りから50日目に、主イエスが命じておられたエルサレムの会堂に集まっていた信徒一同に聖霊が降って、あらゆる国々の言葉で福音を語り始めました。このことは使徒言行録1章で、約束されていた出来事でした。1章8節で主イエスは、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる」、とお語りになりました。信徒たちは、その約束の聖霊を待ち望み、一堂に会していたのです。

聖霊の火が降って信徒たち一同が語った内容は記されていませんが、主の十字架の死と復活の贖いによる新しい契約について語ったのではないかと思います。22 節から 24 節にかけて、ペトロは、イスラエルの人々によって殺され、父なる神に復活させられた、ナザレのイエスこそ、救い主である、と語っています。信徒たちが、聖霊によって語った外国語でのメッセージもまた、これと同じ内容だったのではないのでしょうか。教会のメッセージの主眼は、教会の誕生であるペンテコステから現在に至るまで、「ナザレのイエスこそ救い主キリストである」、という福音に帰結するのです。そしてこのメッセージが伝わるのは、ただ、ご聖霊の働きによるのです。教会に呼び集められることから既にご聖霊の働きがあるのであり、ご聖霊の臨在なくしては、聖書のメッセージも、伝道する言葉も、語る者も聴く者も、その真理に与ることはできないのです。これが今日のキーポイントその1です。

さて、聖書箇所を戻りまして、17 節から 21 節に引用されているヨエル書3章に記されている預言はこうです。旧約聖書1425 ページになります。

その後／わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。あなたたちの息子や娘は預言し／老人は夢を見、若者は幻を見る。その日、わたしは／奴隷となっている男女にもわが霊を注ぐ。天と地に、しるしを示す。それは、血と火と煙の柱である。主の日、大いなる恐るべき日が来る前に／太陽は闇に、月は血に変わる。しかし、主の御名を呼ぶ者は皆、救われる。主が言われたように／シオンの山、エルサレムには逃げ場があり／主が呼ばれる残りの者はそこにいる。

この預言は、ヨハネの黙示録を彷彿とさせ、終末について語っているように思える言葉ではないでしょうか。事実、ヨエルの預言は終末について預言しているのです。では、ペンテコステによって成就された終末とは一体何だったのでしょうか。主の御再臨は、いつ起こるか誰も知らない、ある一瞬ですが、終末とは、ある一瞬のことではないのです。終末とは、ペンテコステに始まり、主の御再臨によって終わる、継続した時間の中にあるのです。およそ 2000 年の間、常に終末なのです。その終末における老人の夢や、若い者の幻とは、主イエス・キリストの十字架の死と復活による贖い、そして、永遠の命をいう素晴らしい夢であり、幻なのです。キーポイントその2は、終末とは、キリスト者にとって、絶望ではなく、希望であり、嘆きではなく、喜びであるということです。そのように捉える信仰によって、使徒信条の「かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん」、という言葉も、主の祈りの「御国を来たらせ給え」、という祈りも、希望と熱心さをもった、生き生きとした言葉となるのです。

また、18 節、「わたしの僕やはしために、／そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。」とは、今日、わたしが奨励を担当しているように、立てられた器でなくとも、聖霊の働きによって信徒がみな、聖書の御言葉を解き明かす、ということです。わたしたちは、福音を述べ伝えることに、何の躊躇も必要とはしません。働いてくださるのは、聖霊だからです。これが、キーポイントその3です。

さて、わたしたちは礼拝において使徒信条を告白している訳ですが、その中に、このペトロの説教に礎を置いている箇所がいくつかあります。「陰府にくだり」の一節は 25 節から 28 節までから来ています。これは、詩編 16 編8節から 11 節にダビデによって預言されているものです。さらに、「全能の父なる神の右に座したまえり」という一節は、34 節、35 節から来ており、これはダビデの詩、詩編 110 編1節からの引用です。また、42 節、「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。」という箇所は、使徒信条の「聖なる共同の教会、聖徒の交わり」の原型を見ることができそうです。ですから、わたしたちの捧げる使徒信条は、徹頭徹尾、聖書によるのです。わたしたちが礼拝で使徒信条を告白することは、聖書を信じます、と告白することなのです。これが、キーポイントその4です。

要約します。教会は聖霊のご臨在の中で、主イエスの死と復活による救いの福音を正しく伝え、希望と喜びに満ちた終末観の中で主イエス・キリストの再臨を切望し、教会員一人ひとりが伝道し、聖書を信じる信仰を告白する群れである、ということです。そのような教会こそ主の救いを正しく受け継ぐ教会であり、ペンテコステの炎を受け継ぐ聖火ランナーなのです。